

すが、自己紹介が苦手なので良かったです。それにしても欧米人は自己紹介が好きです。

授業の後半では、アメリカの新聞記事の抜粋を読まされました。Davidという記者の生き方についての記事で、ざっと読んで半分くらいしかわからなかったのですが、他の生徒も同様で、それは知らない単語が多かったせい。先生はプリントの最後に単語をリストアップしてあります。「1K」「2K」「3K」……「20K」までレベル分けされています。「3Kまでが common word (頻出単語) です。そのくらいまでできればOKです」

15Kの「trailblazer (開拓者)」、20Kの「gustatory (味覚の)」あたりになると、先生でも知らない単語だそうです。マニアックで難しい単語は無理に覚えなくて、捨てて良い……これは意外な提言で目からウロコでした。今までシラミつぶしに英単語を覚えなければならないと強迫観念にかられていたのが、若干気がラクになりました。3Kまでなら衰え気味の記憶力でもいけるかもしれません。ちなみに3Kの単語は「acknowledge (認める)」「assign (割り当てる)」「compensate (償ふ)」「emerge (出現する)」「legitimate (合法的)」などです。

特集◎世界言語としての英語

# 英語はしゃべれなくていいは 珍説か

## 英語教育の「常識」を考え直す

「日本人は文法はできるけど、会話はできない」  
説の流布

英語教育のこととなると、いろいろ言いたいことがある。いろいろ困ってしまう……と、そんな悩みを抱えているのはどうやら私だけではないらしい。こと英語となると議論百出、話題沸騰、さながら阿鼻叫喚の様相まで呈し、いつこうに話がまとまらない。

英単語を捨てる技術、を学んだ有意義な授業第一回。しかしふと思つたのですが、日本語の本を読んでいて、わからない単語を捨てることつてなかなかないような気が。学術的な専門用語以外では、日本人はほとんど文中の単語を理解していません。それだから、他の言語を覚える余裕がないのでしょうか。改めて日本語のメモリ使用量の多さを実感しました。日本人が英語が不得意なのは日本語に堪能すぎるからです。

阿部公彦

(東京大学大学院  
人文社会科学系研究科准教授)

Masahiko Abe

1966年生まれ。東京大学大学院人文科学研究科修士課程修了。ケンブリッジ大学大学院博士課程修了。帝京大学文学部専任講師などを経て、現職。専門は英米文学。著書に『英詩のわかり方』(研究社)、『文学を〈凝視〉する』(岩波書店、サントリー学芸賞)など。

そのせいか、さまざま「都市伝説」も生まれてきた。たとえば次のような説がまことしやかに語られるのを耳にしたことのある人は多いだろう。「学校の授業が訳読中心だから、日本人は英会話ができない」、「帰国子女は意外と英語ができない」、「リスニングの勉強は聴き流すのが一番」、「小学校で英語を教えると日本語ができなくなる」……などなど。

これらの「都市伝説」は興味深いものでいずれもたつ

ぶり時間をかけて検討する価値があると思うのだが、スペースに余裕があるわけでもないのだから、ぼつて議論したい。今回問題にしたいのは、しばしば当然のように口にされる「日本人は文法は詳しいが、会話となるとだめ」との言である。もちろん、「いえ、日本人は英会話ができますよ」などという水掛け論をしたいわけではない。注目したいのは、どうしてこのような問題が頻繁に持ち出されるのかということである。現在行われようとしている英語教育改革の柱になっているのは、非常に単純化して言う、「もつと英語がしゃべれるようになりたい」という、おそらく五〇年以上前から振りかざされてきたトピックを少し現代風にアレンジしたものだ。その根底には「今の英会話力ではだめだ」という焦燥感がある。なぜ、それほど「会話力」なるものに私たちは躍起になるのか。

そこであらためて問いたいのは、英会話というものはそんなにできる必要があるのか、そもそも「英会話ができる」とはどういうことなのか、ということである。もちろん、すぐ返ってくる応えはある程度予想できる。「グローバル社会」の到来でビジネスチャンスは今や世

の結果、私たちが着く結論は、あるいは意外なものとも思えるかもしれない。なぜなら、それは「英会話ができるようになることで、下手をすると害悪さえ生まれる」というものだからである。しかし、その前に手順を踏んで考えよう。まず検証しなければならないのは、なぜ「日本人は文法はできるが、会話ができない」という「都市伝説」が流布してきたのかということである。

もちろん、一般的な英語不要論は決して新しいものではない。少し前にも成毛眞『日本人の9割に英語はいらぬ』が話題になり、ごく最近も行方昭夫『英会話不要論』のような本が世間にくすぶる反英会話的な気分を訴えようとしている。よりアカデミックなアプローチとしては、一九七〇年代にベストセラーとなった中津燎子『なんで英語やるの?』を踏まえた、寺沢拓敬『なんで英語やるの?』の戦後史——『国民教育』としての英語、その伝統の成立過程』や、同じく七〇年代に『平泉試案』を発端に巻き起こった「英語教育大論争」を扱った鳥飼玖美子『英語教育論争から考える』といった著作が、英語教育をめぐる過去の議論の検証を進めてきた。論争の歴史を見てもわかるように、英語熱や英会話熱は過熱する一方では

界各地に広がっている。それどころか、日本国内の活性化も、世界中からマネーを呼びこむことではじめて実現できるのだし、人口が縮小しつつある日本が生き残るためには、海外から人材を呼びこむことも必要。そのためにはやっぱり英会話。英語をべらべらしゃべってどんどん仕事をする。言葉が通じなければ、誰も日本など見向きもしないではないか、といった意見である。

たしかに説得力のある見解だ。ただ、今、問いたいののはあくまで「なぜ英会話なのか」ということである。英語がいらぬなどと言っているわけではない。ただ、会話、会話と騒ぐわりに、「会話とは何か?」ということをもっとも考えたことがある人は少ないのではないか、というのが私の意見である。これだけお金と時間をかけ、議論を積み重ねてきたにもかかわらず、英語教育の実情があまり改善されていないと不満に思う人が多いのはそのためではないか。

従って、以下の議論では会話とはいったい何をやるためのものなのかという原点に立ちもどることで、なぜ日本の「英語教育がうまくいっていない」という意見を持つ人が後をたたないのかをあらためて問い直したい。そ

なく、ときにそのバブルがはじけたり、疑念が呈されたりもしてきたのである。つまり、折に触れて反作用は生じてきた。にもかかわらず、「もつと英語をしゃべれるようにならなければ!」という欲望は必ず復活する。そこで必ずと言っていいほどセットになるのが、「日本人は文法はできるけど、会話ができない」との説だった。その背景にはいったいどのような心理のメカニズムがあるのだろうか。

### スピード主義の英語術

「日本人は英会話ができない」という「都市伝説」の根にある考えを突き止めるのは、さほど難しいことではない。というのも多くの「日本人英会話苦手説」は、もっぱら私たちが英語の「スピード」についていけないことを諸悪の根源とみなしているからである。たしかにそうだ。実は私自身、幼少期を英語圏で過ごしていたにもかかわらず、イギリスに留学してすぐは英語話者が何を言っているかわからないと思うこともあったし、今でも、とくにアクション映画などを鑑賞している際などは、英語

の発言が聞き取れない、ついでに聞けないと思う刹那がないではない。そう、まさに「スピード」について聞けない」という心理には身に覚えがある。

しかし、そこはさすがまじめな日本人。対策もぬかりはない。スピードについて聞けないならば、その理由を徹底的に分析し、緻密に対策を立てようとするのである。たとえばある大学生向けのリスニング教科書では次のような会話の例をあげ、詳しい説明を添える。

Laura: Did you eat yet?

John: No, did you?

Laura: No, but I am hungry. What do you want?

John: Um, I don't know. Could you just make some of your delicious chicken salad?

Laura: Do you know how long that takes? I don't feel like it. You wouldn't want just to go out, would you?

John: I already told you we're short on money this week. You don't listen to me, do you?

Laura: Yeah, I heard. You wouldn't want to go to

the store, then, would you?

John: Sure. What do you want?

男女のカップルが何を食べるかを話題にしている会話で、さほど難しいことが言われているわけではない。日本人学習者に馴染みのなさそうな単語も特にない。さて、この会話にはいったいどんな説明が添えられているだろう。焦点が当てられるのは、「[dʒu:]」という音である。

[dʒu:]「ジ」の音が何度となく聞かえてきますが、正確にはそれぞれ微妙な違いがあります。最初の「や」の取「Did you eat yet?」の「Did you」[didʒu:]は、実際は「[dɪ]」を速く発音しているため、「[ジ:]」だけの「や」に聞こえるかも知れませんでした。また、四箇所ある「do you」の「も」最初「What do you want?」の「や」[dʒu:]、最後「What do you want?」の「や」[dʒeɪ]「や」の音です。残りの「[du ju]」の「や」"could you"「[kʌdʒu:]」"would you"「[wʊdʒu:]」"told you"「[tɔldʒu:]」は共通の「[dʒu:]」の「や」です。(["Listening

to Natural English——映画を聞き取りたい人のために」開文社出版)

何と精緻な分析だろう。とても映画の英語がうまく聞き取れなくて四苦八苦している初級学習者のためのアドバイスとは思えない。さすがにこのコメントは次のように締めくくられている。「しかしながら、こうした音の響きの微妙な違いは、あまり気に留める必要はありません。むしろ、同じ語群でも音に幅があること、そして基本的に的には「d」+「you」は「ジユ」であり、それが英語の自然な音であると実感することが大切です」。しかし、どうだろう。「あまり気に留める必要はありません」といながらも、そもそもこうした音の特徴に気づくのが当然であるかのような、注意の水準のようなものが最後までぶれなく提示されているのは間違いない。

こうした註釈から窺い知れるのは、一見どうということのない日常会話も実は複雑な音のヴァリエーションから構成されているのだ、という言語観である。複雑で微細な音をちゃんと聞き取れないからこそ、私たちの英会話はいつまでたっても「ペラペラレベル」に到達しない

のだ、という。だから、この教科書ではこの「ジユ」以外にも「+you ガッチュ」「+you ミッシェ」といった細かい点に絞ることで、いかに英語のスピードについていくか、そのコツを伝授しようとしている。

このような例を見て、なるほど、と思う人もいるかも知れない。私も、なるほどと思わないわけではない。目の付け所としては面白いし、決して間違ったことを言っているわけではない。しかし、何かが違う、どこか変だ、という気もする。決して間違っているわけではない。それどころかきわめて正しいのだが、はつきり言っただけは過剰に正しくはないか？ 英語の初学者がこれほどの微分的な視点で用例と向き合わなければならぬものだろうか。まるで音声学の専門家のような姿勢が要求されているはしまいか。

この例は極端なものとも思えるかもしれないが、「何としてでも英語の音を聞き取れるようになりたい」と切羽詰まった気持ちになれば、いずれはこうしたアプローチに走りたくもなるのかもしれない。「ジユ」や「ミッシェ」は聞き慣れない人も多いだろうが、「[と]」や、「[と]」と「[と]」の違いとなれば、高校の英語レベルでも頻繁に言及

される。現在、書店で販売されているリスニング関係の書籍を見渡してみても、『絶対「英語の耳」になる！リスニング50のルール』（音の連結や脱落に重点を置いたもの）、『奇跡の音 8000ヘルツ英語聴覚セラピー』（英語は8000ヘルツの音を聞き取るのが大事との考えのもと、8000ヘルツ帯の音を練習させる）、『究極の英語リスニング』、『4週間集中ジム』など、いかにも技術的な洗練(?)を感じさせる教本が目白押しである。<sup>1)</sup> 高速で流れていくわずかな音の破片を必死に拾い集めることで、やっと英語そのものに到達できるのだ、というほとんど神秘的なほどのスピード主義はずつとまかり通ってきた。多くの人は英会話についての次のようなコメントも、耳に馴染みがあるだろう。いつもどこかで私たちが耳にしている、「がんばれ、英会話ー」のかけ声である。

「相手が英語を話しているのを聴くと、ある程度は理解できる。だが、自分から流暢に話すことができない」。これが、大多数の日本人ビジネスパーソンが感じる、自身の英語力ではないだろうか。

教科書の考え方と驚くほど似ているということだ。ほとんど強迫観念の域にも達している何かがある。「これでは実際の会話のスピードについていけない」という決め台詞にはつきりと表れているのは、「私たちは英語のスピードについていかなければならないのだ!」という「スピード中心主義」の思考なのである。

スピード。英語とはかくも、せわしない言語だったのか。それに対し、私たち日本語話者はかくものろまだったのか。耳と——そしてひよつとすると頭までもが——こと速度ということに関してとはかく性能が悪く、遅い。これは要するに、日本語話者が「愚鈍だ」ということを示すのだろうか……次々にこうした問いが浮かんでくる。

しかし、ちよつと考えてみてほしい。私たちが日本語でしゃべっているときには、十分ハイスピードの会話がかわされているのではないか。職場でも、電車の中でも、あるいはテレビのヴァラエティ番組でも、会話の速度は相当なものである。とても私たちの耳や、そして頭の性能が、速度という面で遜色があるとは思えない。

では、どうしてこのような「英語高速説」が繰り返し

中学、高校の受験英語では、英文読解のために日本語に訳し、英語を書いたり話したりする際もまず日本語で文章を考えてから英語に訳す。これでは実際の会話のスピードについていけない。

頭に浮かんだイメージを、日本語を介さずに始めから英語で表現する。相手の言っている、あるいは書いている英語も、日本語に訳さずに英語のまま理解する。

そのためには、音声教材の聴き流しだけでは不十分で、自分から口を動かす「音読」で訓練したほうが、遠回りのように総合的に英語の運用力を鍛えることができる。(今年こそ英語を上達させる2つの「コツ」『東洋経済オンライン』二〇一五年一月五日)

かなりおおきくばで気合い中心の根性論のように聞こえる。「日本人ビジネスパーソン」という呼びかけからして、「二四時間働けますか?」というかつての栄養ドリンク「リゲイン」のコマーシャルを想起させるようなヴァイタリティ中心主義。何しろ『週刊東洋経済』の記事だ。しかし、おもしろいのは芯にある前提が、リスニングの

語られることになるのだろう。私には、スピード主義の人たちが何かを勘違いしているような気がしてならない。たしかに私たちの日常会話は、どうやら目にもとまらぬ高速で繰り広げられているらしい。これはすごいことだ。しかし、私たちはそうやってやり取りされる高速の情報を、果たして全部聞き取っているのだろうか? いくら現代人が忙しくなったからといって、私たちはほんとうにそれほど高速生活を強いられるのか。はつきり言って、適当に端折って聞いているのではないか。

これは、必ずしも斬新な見方ではない。会話の中で私たちがしがと捕まえてそれと認知しているのは、鍵になるポイントだけである。ちょうど人間の顔を認識するとき私たちがあらゆる細部をすべて確認しているわけではなく、ごく一部の情報からの類推で相手が誰かを認めているというのと同じである。やや極端に言えば、氷山の一角だけを元に情報の全体像をつかむ能力を私たちは持っている。

ということとは、英語を聞き取るためには、一字一句聞き取るよりも、氷山から全体を類推する、その延長拡大的な技術を身につければいいということになるのか。は

い、その通りだ、と私は思う。そしてそういう点に力をいれる教科書もある。しかし、そこで終わってしまったのは大きな間違いを犯すことになる。先に紹介した教科書のような、いたずらに精緻なアプローチにおぼれる危険もある。

それよりも、もっと根本的なポイントがあるのだ。そもそも実際の会話では、情報のやり取りなどそれほど行われていないのではないかと、ということである。氷山の一角どころか、そもそも情報が希薄なのではないか。

### 会話でほんとうに行われていること

これは大事なポイントなので詳しく見ていきたい。ふたたび先の会話を素材にしてみよう。

Laura: Did you eat yet?

John: No, did you?

Laura: No, but I am hungry. What do you want?

John: Um, I don't know. Could you just make some of your delicious chicken salad?

った言葉がさりげなく差し挟まれていることからわかるように、これは単なる情報のやり取りや確認ではなく、交渉なのであり、態度と態度のぶつかり合いなのであり、最終的には共通見解の醸成に向けての足場固めなのである。そこでもっとも大事なことは「したい」「しよう」という気分の交流だと言える。微妙なことばのニュアンスを通して、「あなたは何がしたいの?」「私はそれについてどう思う?」といったことを差し出し合い、ことばの表面に表れていないレベルも含めて、相手と自分の意見とを折り合わせようとしている。

つまり、ここで会話の本当の土台になっているのは「私何がしたいか」よりも、「何を」の部分の外にある、「私は……したい」の方ではないかと思えるのである。チキンサラダにするのかどうか、外食するかどうか、といったことは慎重の上に慎重を期して協議されるほどのことではない。はつきり言つてどちらでもいいのだ。いや、ほんとに重要なことなら、会話で決めるよりも書面の交換などが必要となるであろう。あるいは協議するまでもなく、おのずと結論が出てくる。所詮、こうした会話で決められることなど、たいしたことではない。

Laura: Do you know how long that takes? I don't feel like it. You wouldn't want just to go out, would you?

John: I already told you we're short on money this week. You don't listen to me, do you?

Laura: Yeah, I heard. You wouldn't want to go to the store, then, would you?

John: Sure. What do you want?

たしかにこの会話例では、食事をいっするの、何を食べるのか、といったことについて具体的な協議が行われている。「チキンサラダを食べたい」「作るのに時間がかかるし面倒くさい」「外食するのはお金がもったいない」といった意見が交換されている。

しかし、そのような具体的な行動指針の確認をいっつも、より重要なことがある。下線を引いた部分にちょっと注目してほしい。「Do you know how long that takes?」「チキンサラダを作るのがどれくらい手間かわかっていますか?」「……would you?」「出たくはないんですか?」「I already told you……」「(言ったたろ)」とい

にもかかわらず、チキンサラダにするのかどうか、外食するのか家で食べるのか、といったことについて日々私たちは会話を交わす。それは会話をすることが、情報よりも共感のやり取りにつながるからである。情動のやり取りと言つてもいい。そこには具体的な「何を」のフアクターも絡むが、実際には「何を」について話し合っているようにいて、その「何を」をめぐる各人の態度の関わり合いそのものに意味がある。

ことばはコミュニケーションの道具だと言われるが、こと言語学習となると、多くの人はそれを単なる情報内容の伝達と取り違える。情報には上に引用したように、ことばとして、データとして残されうる「内容」の部分ももちろんあるが、それが誰かに対して発せられている以上、「意向」、「感情」を含めた広い意味での「態度」の要素がきわめて重要で、その部分を無視し、会話の習得が高速暗号解読の作業であるかのように考えることには根本的な誤りがある。それゆえにさまざまな誤解も生じてきた。

もちろん「態度」なるものは、文字情報としてあらわすのがきわめて難しいものである。語気やイントネーション

ヨンだけでなく、視線やジェスチャー、タイミング、場所、ムードなどからも複合的な影響を受けるからである。だからこそ、文学や映画の作品では、作り手は一般の読者や観客が意識しないような微細な表現の揺れにまで気を遣い、与えられた言語や映像というメディアを最大限に活用して「態度」の全体を表現しようとするのである。そしておもしろいのは、現実の会話でもそうしたメディアの表現にまさるとも劣らないきわめて複雑なやり取りがごくふつうに行われているということである。チキンサラダにするか、外食するかといった情報のやり取りの中で、「態度」が表明され、それに対する拒絶や受け入れがあり、またそれに対する反応があり、といったプロセスが進行しているのである。

### 「態度」とは何か？

こう考えてくると、会話をうまくこなすためには「英語のスピードについていこう！」などという高速暗号解読主義的なアプローチでは不十分だということがわかってくるだろう。「ジュ」や「チュ」の聞き分けにはそれな

話とはまさにそういうものではないだろうか。内容よりも情動。ムードの交流が行われていれば成立するのが口頭のやり取りなのである。先のチキンサラダの例では、例文ということもありそれぞれの発言にいちいち「意味」があつて情報がやや不自然なほど濃密で込み入っていたが、実際の会話ではおそらくオウム返しや相槌が多く、互いの態度の確認や摺り合わせに費やされる時間が相対的に長いはずだ。

ただ、そのあたりには文化によつてやり方の違いがあつて、日本語の会話ではよく「なあなあ」と言われたりするるように、互いの態度の誘導や一本化に多くのエネルギーを費やす。これに対し英語では——少なくとも日本語話者の目から見ると——そうした作業にはそれほど手間をかけない。日本語を母語とする人が英語でしゃべると、やや過剰すぎるほど頻りに相槌を打ってしまうのもそのためだ。しかし、だからといって英語では態度の表明が薄いのか、相手の態度に対する受け入れや拒絶が稀薄なのかというとなんかそうではない。単にリズムやタイミングなど表現の方法が違うだけである。ただ、慣れない人は、まるで社交ダンスをはじめたばかりの人のよう

りに耳の慣れも必要だし、そこにエネルギーを注ぐことが無駄だとは思わないが、映画の聞き取りの達人になるよりも、現実の会話に参加することに興味があるのなら、何よりも言語や文化によつて情動や態度のやり取りの方法が違うということを意識しなければならぬ。

そもそもそうした異文化の情動や態度が「習得」されるものなのかどうか、あるいは「習得」すべきものなのかどうか、私はあやしいとは思っているが、たとえば海外に住んだときに現地コミュニティに馴染みたいという気持が生ずるのはごく自然なことだろう。そういうときには情動のリズムのようなものを身体で覚える必要が出てくる。

私の友人があるとき、こんなことを言っていた。「いやあ。電車の中で四十代の女性が三人で話していたんだけど。みんな、相手が何を言っているか全然聞いてないんだよね。それぞれが好き勝手にしゃべっているだけ。あれでよく会話になるなあと思つて」。これは決して女性差別的な意味で引用した文句ではない。男性同士でも、たとえば深夜の居酒屋などでは十分に生じうる状況である。友人は「よく会話になるなあ」と言っているが、会

にうまくそのリズムに乗れず、ステップを間違えて相手に「？」という表情をされ、何となく「会話がうまくいかなかった」という感想を持つ。何だかしくりこない。流れに乗れない。だから、相手のことばや態度の方向も予想できず、会話がどこに向かおうとしているのかわからない。こうなると、個別の語をしっかりと聞き取ることで難局を乗り越えようとするようになるわけだが、いざ、一語一語聞き取ろうとすると、「ジュ」とか「シュ」とか言つていて実に難しい！ 英語とは何と高速で難解な言語なのだろう！ 学校で習った構文のことなんか考えている暇がない！ やつぱり英文法なんか役に立たないではないか！ そこで出てくるのが、例の「学校で文法をやり過ぎたせいだ！」という繰り言なのである。

そもそも日本語だつて、一語一語聞き取ろうとすればけつこう難しい。何より、そんなふうに一語一語を聞き取ることにエネルギーを使っていたら、会話がいつたどこに向かおうとしているのか、その人が何をしようとしているのか、その方向が感じ取れなくなってしまう。これでは本末転倒。相手との情動のやり取りなど到底実現しないだろう。むしろまずは大きな方向を感じ取るこ

と。たいていの言葉は、その方向から予測できるし、逆に予測できないような意外性に富んだ表現を差し挟むときには、話者は「今、私は意外なことを言っていますよ」というシグナルを出すものだ。だが、慣れない言語だと、そうしたシグナルをうまく出せない。そのため、相手を間違った予測へ導いてしまい、自分の発言がいちいち相手に唐突に聞こえてしまう一方、自分も相手の方向が予測できないから、その言葉が謎めいて難解に聞こえる。

では、そういう情動のリズムや共感のやり取りのルールのようなものを、うまく勉強する方法はあるのか。言うまでもなく一番いいのは、実際にそうした会話を多く行うことである。そして巻き込まれることである。自分がその場に居合わせなくとも、文章を読んだり、音声や映像でそうしたやり取りを聞くだけでも多少は違う。でも、多くの人は言うだろう。そんな時間はないのだ！と。効率良くやりたいのだ！と。実は私も、そのあたりの練習を効率良くやる方法はないものか、教材作りを検討しているところなのだが、まず頭に入れておくべきは、会話の中心が情報よりも、情動や態度のやり取り、もつとという人間の感情の動き方にあるということなのであ

自身がそうした教材の開発を研究しているくらいなのだ。ただ、ここで前提になっていることにあらためて注意を引きたい。すなわち、会話の中心は情報よりも、情動や態度のやり取りにある、ということである。

会話の習得、そのものに重きを置くのであれば、情動、共感、態度といった要素にこそ注意を払わなければならない。しかし、たとえば現代の「ビジネスパーソン」が世界を相手に仕事をするときに、果たして情動のやり取りだけで何が済むのだろうか。いささか心配になってくる。たとえばアメリカに行って一般家庭にホームステイしてこようという高校生なら、情動のやり取りのルールだけでも学んでくればしめたものである。しかし、「ビジネスパーソン」ともなれば、何より大事なのは数字をはじめとしたハードなデータである。しかし、考えてみればそのようなハードなデータはそもそも会話の中だけで扱われるようなものではないだろう。先にもちらっと触れたが、ことが重大であればあるほど、情報は紙なり磁気データなり、何らかの形の記録媒体を介することに

人間は道具を使う動物だと言われる。火、車輪、刃物

る。とりわけ大人が言語を習得する際には、意識的にそうした要素に注意を払うことが大いに役立つ。だから、教材も細かい情報の一つ一つに注意を払わせることに重きを置くものではなく（しつこいようだが、そういうものが不要だと言っているわけではない）、全体の流れに注意を向けさせるようなものが望ましい。情動のリズムを感じ取らせるもの、態度の方向を読み取り、また自らそれを提示するための助けになるようなものである。

### 人間とは何か？

さて。こう見てくると、「日本人は英会話ができない」という都市伝説がいかにも誤った前提によつて形成されたものが見えてくるだろう。そこで、いよいよ最後のステップである。冒頭で私は「英会話は害悪である」というような結論を予告した。しかし、ここまで読んでくださった読者は、「英会話害悪説」どころか、私が今一つの「英会話上達法」を提唱しているにすぎないと思っ

たかもしれない。

たしかにそういう側面もある。今も触れたように、私……と人間の文明では各段階に応じて決定的に重要な道具が生まれてきた。そういうものの中でも、とりわけ重要性をもつてきたのは記録媒体である。まず何よりも、言葉がある。はじめは話し言葉。それから書き言葉。そうして紙が発明され、そうすると文法が意識され、句読点や段落などの書記法が整備された。その後には録音装置や映像機器の発明がつづき、今はデジタルデータが主流となりつつある。

こうした経過を見てもわかるように、人間は道具を使うことで自らの負担を減らしてきた。なるべく自分ではやらない。いわば「外注」するのである。かつてはこの外注は、主に身体的なものだった。自分の手足を動かさずにものを動かしたり、つくったり、変化させたりする。記録媒体の発達が示すのは、人間が身体だけではなく、いわば精神の働きを外注するようになったということである。記憶、推察、判断といったことを、なるべく自分でやらない。

そう言うと、何となく人間が人間でなくなっていくかのように思えるかもしれないが、実際には事故を防いだり、何かを正確に作成したりするときには、むしろ人間

がかかわらない方がいいことは多い。法律や行政といったシステムでも、そのシステムがきちんと整備されたものなら、いちいちの段階で人間がかかわらないほうがむしろうまくいくことがある。扱う人が替わってもうまく機能するのが、すぐれたシステムというものだからだ。

これまで見てきた会話をめぐる議論を振り返ってもらえばわかるように、人間のやることというのは、ムードに影響されがちだ。情報のやり取りよりも、情動や態度の交流こそが行われるのが会話。いや、それが人間というものなのだ。このところ、グローバルな場でビジネスや政治を行おうとしたい人が増える一方、文学や芸術に関心を持つ人はどんどん減っている。もつともなことだろう。グローバルな場では、情報の正確なやり取りが大事。ましがった数字や、ふさわしくない決定は極力避けねばならない。情動などという、得体のしれないものに左右されることがあつてはならない。たとえば文学や芸術の作品中には情動の表現が横溢している。そうした表現を、ハードなデータに還元して説明するのは難しい。実に面倒で厄介で迷惑なものだからだ。従つて、ビジネスの世界の人がそうしたものを話題にするのは、売り上

げ部数や観客動員といったハードな要素を通してのみなのである。

しかし、英会話の習熟を果たそうとするなら、態度の読み取りや表明、情動や共感のやり取りと無縁でいることはできない。むしろそれが会話の肝なのである。その部分に目をつぶつて、高速暗号解読の技術だけを磨こうとしても時間と金の無駄になるだけである。そう考えてくると、少なくとも小学校、中学校、高等学校という段階で子供がどのように言葉と接するべきか、どのような言語体験をさせる必要があるかは自ずと見えてくるだろう。たとえ手間がかかっても、たとえ完全にはうまくいかなくても、言葉の情動的な面に彼らの意識が向くようにすることが必要なのだ。

その一方で、グローバルな場でビジネスを展開しようとする人はどうしたらいいか。そういう方々が、それでも英会話の習熟を目指したいというなら、やはり情動と共感のやり取りの現場にもう少し足を踏み入れることをお勧めする。ふつうの日常会話でもいいし、テレビのトークショー、あるいは映画や小説でもいい。言葉が言葉であるために必要なのが何かということであらためて考

えさせてくれるものなら、間違いなくビジネスパーソンの英会話をアップさせてくれるはずである。

### 「英会話は危険」説

しかし、最後にあらためて言う、情動や共感だけにたよつてはビジネスは成り立たないし、たとえば行政や政治といった話になつてくると、情動によりかかったシステムの運用はむしろ危険なものだと思える。人間の最大の知恵は、いかに自分が無力かを悟つたところにあつた。なるべく自分の能力を過信しない。なるべく全部を自分でやらない。書き言葉のルールが整備された十六世紀以降は、まさに近代文明の発展と重なつた時期だ。書き言葉とはまさに近代そのものなのである。石であれ、紙であれ、磁気データであれ、ものごとを単に口頭で伝え合い情動のうねりの中で決めたり運用したりするのはなく、書き記して広く世に広め、子孫に伝え、ときには議論の素材としたりする。そんな発想こそが私たちの知つて文化をつくつてきたのである。

現代社会において言葉はより媒介的に、より間接的に、

つまり、さまざまなメディア装置を通して流通するようになってきた。私たちの言葉との接触は、人間の抱え持つた弱さをカバーするべく、より書き言葉的なシステムへの依存を強めているのである。そう考えると、言葉のシステム化の根本にある最低限の法則、すなわち、このところ学校教育で目の敵にされてきた「文法」、さらには「文体」「レトリック」といった概念をも頭に入れずしては先へ進めないことは明白である。たとえば「文法」は必ずしも学校で習う「文法」と同一とは限らないが、少なくとも言葉の運用には一定のルールがあるということ、そしてそのルールを知ることこそ、そこから外れる自由も得られるし、そうやって上手に逸脱することで言葉をうまく使いこなす術も身につけられるのだということも頭にに入れておくべきである。広い意味での読解力なくして、ビジネスも政治も行政も成り立たないからだ。私たちがメディアを介して情報と接する機会が増えれば増えるほど、人間の注意力や認知がどのように働かか把握しておくことが必要となる。そうした注意の働き方を知るには、まずは言葉の構造を知ることが大事だ。そのためには、書かれたものとしての言葉とのより濃密



な接触に時間をかけるべきなのである。グローバル社会で英語を通して活躍したいなら、まず英語を読まねばならない。書くことも、読むことからしか始まらない。英語だけでは足りない。母語である日本語についてもそれをやる必要がある。言葉は——あるいは「言葉的なもの」は——情報伝達という行為の根底にあるものだ。それを読み解く力がない人は、おそらく次々に更新されていくメディア装置の変化にもついていくことができない。

もちろん、そのうえではたとえ振り返るのもいい。過剰に書き言葉的なシステムに依存した自分が、果たしてほんとうに「人間」なのか？と。そうなつたら、もちろん会話の出番である。英会話でも、日本語会話でも思いきりやって、自分の中の「人間」を満足させればいいだけのことだ。

＊本稿の一部は、二〇一五年二月七日田舎女子大学にて開催された日本フランス語フランス文学会関東支部における、海老根潤介氏、松永美穂氏、澤田直氏とのシンポジウム「いま外国文学を教えるということ」での報告に基づいて記述する。

〔注〕(1) この調査については研究社の高野渉氏のお世話になった。

特集◎世界言語としての英語

# 少数言語は復権するか

## ソーシャルメディアへの期待

ソーシャルメディアで使われる言語

英語(三億五九八二万)、スペイン語(億四二八六万)、ポルトガル語(五八五三万)、フランス語(四四三七万)、インドネシア語(四三八〇万)、トルコ語(三二七四万)、ドイツ語(三〇七六万)、イタリア語(二三八九万)、アラビア語(二〇一六万)、中国語(二〇一一万)……これは、

上村圭介

(大東文化大学外国語学部准教授)

Keisuke Kamimura

1997年大阪大学大学院文学研究科博士前期課程修了、2007年慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程単位取得退学。博士(学術)(慶應義塾大学)。国際大学グローバル・コミュニケーション・センター主幹研究員などを経て現職。専門は言語政策、情報社会学。著書に『インターネットにおける言語と文化受容』(共著、NTT出版)、『クリエイティブ・シティ』(共著、NTT出版)など。

二〇一二年七月におけるフェイスブック利用者数の多い上位一〇言語である。二位以下の言語のうち、スペイン語からアラビア語までの八言語の利用者を足し合わせると、すでに英語の利用者数を超えている。近年、英語圏以外の国や地域でのフェイスブック利用者が大きく増加していることを考えれば、英語以外の言語の利用者の割合はますます大きくなっていることだろう。

直近の動向では、中国語でフェイスブックを使う利用

# 世界言語としての英語

トマーシユ・ユルコヴィツチ 母語は世界言語によつて磨かれる——あるチェコ語話者の回想……………014

荻谷剛彦 スーパーグローバル大学のゆくえ——外国人教員「等」の功罪……………038

船川淳志 グローバルイングリッシュでいこう……………053

辛酸なめ子 数十回目の英語学習発作……………070

阿部公彦 「英語はしゃべれなくていい」は珍説か——英語教育の「常識」を考え直す……………075

上村圭介 少数言語は復権するか——ソーシャルメディアへの期待……………091

木部暢子 危機方言はおもしろい！……………101

## 論考

三浦伸夫 楽しみとしての科学——18世紀英国の女性と数学……………124

マーク・リラ 読み解けない時代——なぜリバタリアニズムに退行したか……………146

ピエール・グロセル

一九八九年に起きたことは何だったのか……………161

東アジアの共同知としての「王道」思想——人類と自然との契約……………173

王 柯

## 連載

山崎正和

リズムの哲学ノート……………

第六章 リズムと自然科学(前編)……………218

グラヴィア地域は舞台

御厨 貴 咲かせよ舞台芸術の花、地域から開け……………

世界のパノラマを！……………114

劇団文芸座(富山県富山市)……………

世界の思潮

大西 裕 官僚たたきは正しかったのか……………196

—— 政官関係のもう一つの見方……………

福嶋亮大

香港のストリートから考える……………201

写真で読む研究レポート

本田晃子 イワン・レオニドフと紙上の建築宇宙……………004

## 時評

芳賀 徹 「桃源万歳！」展の回想……………138

高階秀爾 「写し」と「本歌取り」……………142

細谷雄一 メルケル首相の東京講演……………188

張 競 土着の記憶を魂に響くリズムで……………192

渡辺 裕 名曲喫茶という社会教育施設……………206

藤森照信 利休と飛び石……………210

奥本大三郎 「それから」とピケティ氏……………214

フォーラムレポート

グローバルな文脈での日本……………236

Table of Contents in English……………238